Made in Aomori House

04

大学の20階に出現した、現代の“写し”茶室

株式会社 大山建工

文=栗本 千尋　写真=三井嶺建築設計事務所 提供
text:Chihiro Kurimoto　photo:Rei Mitsui Architects

OOYAMA KENKO

“茶室オタク”の建築家と、現代の名工による“写し”の挑戦

ITの最先端を学ぶ千葉工業大学。2025年、津田沼キャンパスのビルの20階に、伝統と現代が融合した茶室「青灯亭（せいとうてい）」が誕生しました。設計は、坂茂建築設計を経て独立し、最近では「EXPO2025 大阪・関西万博ポップアップステージ西」も手がけた建築家の三井嶺さん。東京大学大学院で茶室の研究を行い、「茶室オタク」といえるほど茶室に詳しい三井さんと、厚生労働省の「卓越した技能者（現代の名工）」にも選出された八戸市の大山建工。その出会いは、茶室研究の第一人者である故・中村昌生氏から「八戸にいい大工がいる」と教えてもらったことがきっかけでした。

「最初は新千歳空港に直結するホテルのロビーフロア内に茶室を造成するプロジェクトでご一緒しました。現代の名工にも認定されていますが、それに満足することなく、常に次へ次へと革新を続ける姿勢が、私の考える茶室づくりと非常にマッチしたんです。これで3回目の協働になりますが、毎回、新しい挑戦ができています」

本プロジェクトの核となるのは、日本文化の伝統的な創作手法である“写し”の精神です。大阪の水無瀬神宮にある宮家ゆかりの茶室「燈心亭」をモデルにしながら、単なる模倣ではなく、現代の空間バランスに合わせて細部を再構築する“真の革新”を目指しました。

「中村先生の解説文では、宮様がお座りになるであろう点前座まわりに『松竹梅があしらわれている』と書かれていたんです。しかし、実際に現地調査したところ、タケはあるのですが、マツについては使われているものの中村先生が指摘していた場所とは違う箇所にあり、ウメは特定できませんでした。つまり、実は松竹梅ではなかったんです。見つけてしまった事実は無視できない。けれども、宮家がお茶をたてるのにふさわしいように松竹梅をあしらったんだろうという先生の推論はストーリーとして美しいと思い、“写し”の精神に立ち返ることにしました。“写し”とは、単なるコピーや模倣ではなく、オリジナルを現代的にアレンジし、発展させる伝統的な創作手法のことです。オリジナルを深堀りして本質を見出したうえで、先人の創作に1ミリでも積み重ねることができれば、それは進化なんです。そこで『青灯亭』には中村先生の解説文とは違う形ではありますが、松竹梅を使おうと考えました」

こうして、現代の“写し”茶室が誕生しました。

1.天井まで伸びるハイドアが、和の雰囲気ながらもスタイリッシュで現代的な印象のアプローチ。俗世から意識を切るための空間としての役割を持つ。
2.寄付兼腰掛待合には正客石など定石の石組みとする代わりに、柱を一本立てて正客と連客の境を示している。
3.前室や坪庭のような役割を持つ内坪から、入側縁を見る。手前の丸柱はコブシだが、こんなにまっすぐなものは珍しいという。

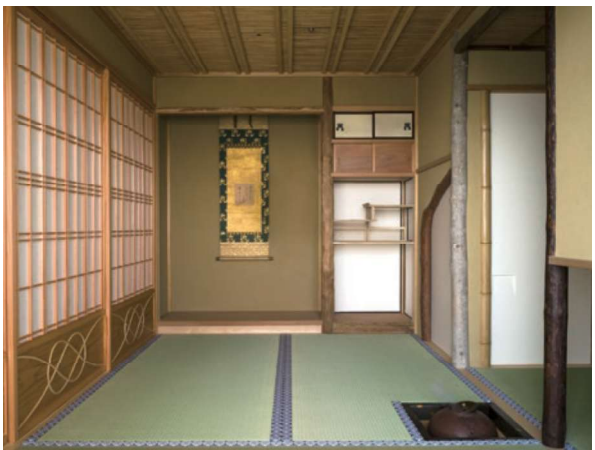
中村昌生氏の解説文に出てきた松竹梅を配置した茶室。

青森の豊かな森がもたらす、市場には出回らない銘木

この茶室には、青森県産のスギ、アカマツ、クリといった地域材が効果的に配されています。

「茶室に使う木材は、ゆっくり時間をかけて育ったものでないといけません。市場に出回る一般的な住宅用の材木は、早いもので30年あれば使用されるものがありますが、茶室用は目が詰まっていて綺麗な材木を使用するため100年以上たった木が使われます。また、丸太も見た目は細いですが厳しい環境の中で育た材木を吟味します。茶室の空間として成り立たせるためには、年輪が引き締まった、研ぎ澄まされた材が必要なんです。枝打ちなどを適切に行って育てられた木でなくてはなりません」

なかでも特筆すべきは、大山建工の独自のネットワークにより調達された、一般的な市場には出回らない特殊な材料の数々です。例えば、銘木業界でも極めて稀な、3メートルにわたって径がほとんど変わらない真っ直ぐな垂木用の杉の小丸太や、自然な曲線を描くアカマツの枝。これらは、自然のままに見えながらも、室内の意匠として成立させるために高度な加工が施されており、職人の目利きと、“隠し包丁”のような繊細な技術が光っています。



1.内坪の露地。アプローチから進むにつれ伝統的な要素が増える。
2.板を並べて「桟」と呼ばれる横木で固定した「板桟戸」は、無骨で頑丈。
3.根石は木の柱の底面を削り出す「ひかりつけ」を採用した。

大山建工の技術が最も象徴的に現れているのが、茶室独特の根石の納まりです。通常の建築では石を平らに削り、その上に柱を立てますが、茶室では「自然の石を削ってはならない」という思想に基づき、石の凹凸に合わせて木の柱の底面を削り出す「ひかりつけ」という工法が採用されます。

「現代の感覚に合わせた寸法調整も行いました。オリジナルの柱の寸法をあえて縮小し、ビル内の空間に馴染む軽やかさを演出するなど、伝統的な建築の“決まった型”の数字を守るのではなく、その数字が目指した“本質的な美しさ”を追求したんです」

こうした三井さんの思いに、大山建工の職人たちは手間を惜しまぬ手仕事で応えました。

次世代へつなぐ、学びの場としての茶室

完成した「青灯亭」は、大学の来客対応や教育の場として頻繁に活用されています。

「従来の茶室のような『主客』の固定された関係ではなく、炉を囲んで座る現代的なコミュニケーションが可能な平面の計画になっています。実は、本茶室のモデルとなった宮家ゆかりの『燈心亭』には、決まった作法の記録が残されていません。既存の流派の型をなぞるのではなく、この空間でどう振る舞えば美しく、人をもてなせるかを学生自身が考える必要があります」

青森の厳しい冬を耐え抜いた県産材の力強さと、それを見事にさばいた大山建工の技術は、訪れる人々に日本文化の深みと、自然素材の心地よさを伝えています。

「1ミリでも積み重ねることができれば、それは進化である」という三井さんの言葉通り、この茶室は青森の木材と大山建工の技によって、伝統を未来へとアップデートした空間となりました。ITの最先端を学ぶ大学において、あえて自然素材と手仕事の極致に触れることは、持続可能性やもののあり方を考える良い機会を与え続けることでしょう。

伝統的な「書院造」の意匠と、デザイン性の高い「違い棚」が融合し、茶室の雰囲気、格を高めている。

茶道具の準備や片付けなどを行う「水屋」。

DATA | 物件概要

施設名：千葉工業大学 茶室「青灯亭」
構造及び階数：木造平屋建て
建築面積：32.77㎡
延床面積：32.77㎡
完成年月日：2025年4月

設計者：三井 嶺
三井嶺建築設計事務所
施工者：株式会社 大山建工

[県産材の使用状況]

構造材：梁にアカマツ・スギ、下地材にスギ
内装材：敷居にアカマツ、鴨居にスギ
天井・廻り縁・竿にスギ
床板にアカマツ
造作材にスギ・アカマツ

BUILDER'S DATA | 工務店情報

株式会社 大山建工

八戸本部／青森県八戸市大字河原木字千刈田7-1
Tel：0178-21-3055　Fax：0178-21-3033
eigyo@ooyamano-ie.jp
https://www.ooyamano-ie.jp/

Made in Aomori House

05

木の香りと薪ストーブ 平屋のように暮らす、自然素材の家

企業組合 県木住

文=小田切 孝太郎　写真=今井 聡
text:Kotaro Odagiri　photo:Satoshi Imai

KENMOKUJYU

念願だった薪ストーブのある暮らしを手に入れた M 様ご夫婦。

平屋の心地よさと将来の安心

ご夫婦とお母様の3人暮らしであるM様が住み替えを考えたのは、住まいの老朽化がきっかけでした。お母様の高齢化に加え、積雪時の除雪作業が大きな負担になってきたこともあり、一時はマンション転居も検討。しかし「除雪スペースを確保できる新居」という選択肢が浮上し、最終的に木の温もりに包まれて暮らす道を選びました。

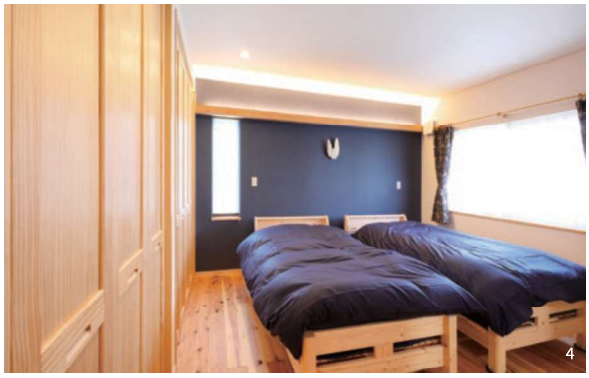
相談先に選んだのは、青森県産材の家づくりに取り組む「企業組合 県木住」です。「地元の木を使い、地域の循環を守る」姿勢に深く共感していたM様に迷いはありませんでした。同社にアプローチしたのは3年前のこと。絶対条件だった「本物の木に囲まれること」と「薪ストーブ」という要望に対し、津軽地域を中心に、県産材と薪ストーブを組み合わせた住まいづくりを数多く手掛けてきた同社なら安心して任せられると感じたからです。

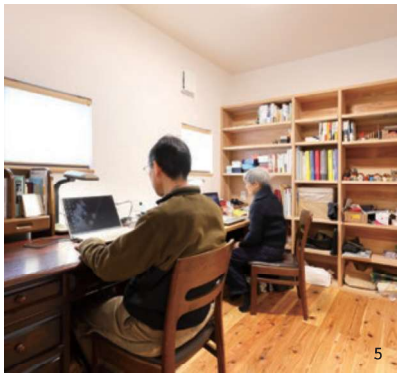
2024年6月に着工し、12月に完成した住まい。新生活の舞台は、切妻屋根が美しく、平屋の利便性を採り入れた2階建てです。1階だけで生活が完結するよう、玄関から寝室、ランドリー、キッチン、リビングが「ロの字型」に繋がる回遊動線。家事負担を減らす最短の設計に加え、階段下収納やキッチン奥のパントリーなど利便性を高める工夫を凝らしました。

リビングから続くウッドデッキは、自家製の梅干しを干すなど手仕事を楽しむお気に入りの場所。寝室からトイレへの移動も近く、家中どこへでもスムーズにアクセスできる住みやすさを実現しています。

また、基礎の高さは40〜50cm程度を確保するケースが多いですが、この地域はハザードマップで浸水が想定されるためご主人の要望で60cmの高さに設定しました。

木材とネイビーの壁材という異素材の組み合わせが生むシックな外観。





1.冬は薪ストーブだけでも十分なほどの暖かさ。2.リビング中央のスギの大黒柱はリビングの顔。
3.芳醇な木の香りが出迎えてくれる玄関。4.寝室は藍色の和紙がアクセントに。
5.寝室脇に設けたご夫婦の作業スペース。

木の温もり、こだわりの造作

一歩入れば、芳醇な木の香りに包まれます。今回の住まいでは柱や床材の7割にスギを使用し、梁にはアカマツ、土台にはヒバと県産材を適材適所で使い分けています。内装や建具にもスギを用いるのが同社の特徴。リビング中央のスギの大黒柱は、「小さな子が遊びに来ると柱に頬ずりしてるんですよ」と語る奥様の言葉からも、その優しく温かな質感が伝わります。

県木住の住まいの特徴のひとつが上吊り式の引き戸です。床にレールや段差がないため掃除がしやすく、将来の足元の不安もありません。施工的にも床材を繋げて貼れるため、空間に美しい一体感が生まれます。重厚な木製建具も吊ることで驚くほど軽く、レールレスでスギの床材の美しさを最大限に引き立てています。

また、アレルギーがある奥様が「身体に優しい住まいを」と自ら提案し、壁には漆喰、天井には土佐和紙、寝室には徳島の阿波和紙を選び抜きました。場所ごとに厳選されたこれらの素材は、建物自体が呼吸するかのように湿気をコントロールし、生活臭を吸着・分解する優れた機能性を備えています。塗り壁のようなしっとりとした質感や、和紙が作り出す穏やかさが空間に安らぎを与えてくれます。

「いつか料理教室をやってみたい」という奥様にとって、キッチンは最もこだわりを反映させた場所です。料理の匂いが生活空間に広がらないよう扉で仕切れる独立型を採用しつつ、内部には使い勝手を考慮して2つのキッチンを用意。4人でも同時に作業がしやすいよう、中央にはダブルシンクを備えた広々としたアイランド型を配置しました。圧巻なのは、専門職人の手仕事によるステンレスの造作キッチンです。加工が難しいとされるステンレスを、継ぎ目のないアール状に仕上げた造形美は、まさに職人技の結晶。手入れのしやすさとデザインを高い次元で両立させています。また、家全体は心地よいスギの床で統一されていますが、キッチンだけは掃除のしやすさを優先してタイル床を選択。「本当はここも木にしたかったのですが」と奥様は話されますが、セレクトしたタイルの色合いは木の質感と見事に調和しています。自然素材による消臭効果も相まって、実用性と美しさを兼ね備えた、充実の作業空間に仕上がりました。

アイランドスタイルで導線が自在なキッチン。奥にはパントリーを設けました。

暮らしやすさと自分らしさ

「掃除のしやすさを最優先したい」という奥様のこだわりから、水回りは徹底してシンプルに。浴室には窓も棚も設けず、掃除の負担を最小限に抑えました。また、将来の負担を見据えてガス乾燥機を導入し、洗濯物を干す手間も省いています。

2階へ上がると、2つの個室とともに、薪ストーブの煙突が空間を貫く印象的なフリースペースが広がります。2階個室の寝室の壁に採用したのは、リサイクルボード「サーキュラーコットンボード」。奥様の知人が手がけているという、古着と和紙を掛け合わせたこの素材は、一見すると端正な紙の表情ですが、目を凝らせばかつての衣類が持っていた鮮やかな色彩が散りばめられています。

インテリア等のアイディアは雑誌やインターネットで収集し、ドアノブや丁番などの黒いパーツも奥様がセレクトしたこだわりの品々。県木住の佐藤時彦代表は「奥様のデザインセンスは非常に高く、打ち合わせ時も建築的な専門知識にしっかり対応してくださるので、私共も大変勉強になった。2階の寝室に採用したサーキュラーコットンなど、新しい素材を知るきっかけにもなりました」と振り返ります。

施主の想いに応えるべく重ねた打ち合わせは平均を大きく上回り、図面は70枚に及びました。3年の歳月をかけ、細部まで考え抜かれた「造作品の集大成」は、施主の感性と職人の技術力が共鳴して生まれた結晶。県産材を使ったこの家は一年を通じて木の家の快適性に満ち、暮らしを豊かにしてくれる場所になるでしょう。

洗面脱衣室&バスルーム。
洗濯からお風呂まで、水気のある作業は全てここで完結できる配置に。

DATA | 物件概要

施設名	一般住宅
構造及び階数	木造2階建て
建築面積	161.85㎡
延床面積	189.50㎡
完成年月日	2024年12月20日
設計者	企業組合県木住
施工者	企業組合県木住

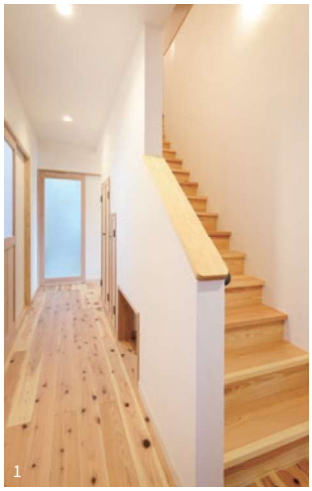
[県産材の使用状況]

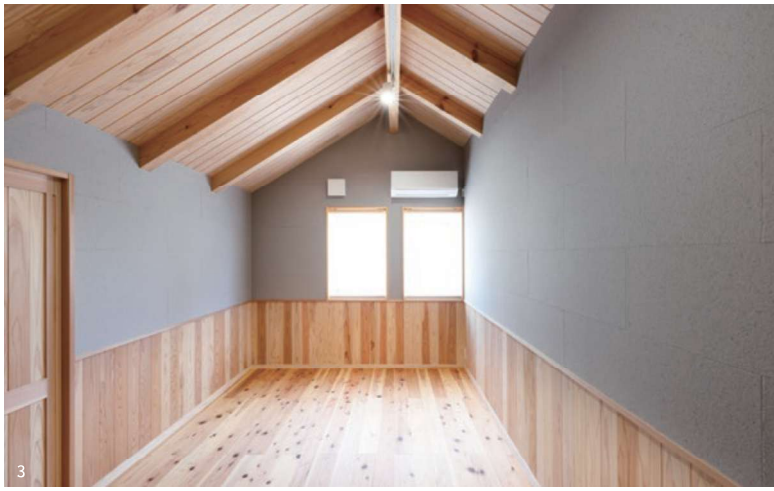
構造材	土台に青森ヒバ、柱にスギ 梁にアカマツ
内装材	床にスギ
外装材	外壁・下見板にスギ

BUILDER'S DATA | 工務店情報

企業組合 県木住

青森県青森市浪岡大字徳才子字福田60-2
Tel：0172-55-7793　Fax：0172-55-7559
info@kenmokujyu.com
https://www.kenmokujyu.com





1.スギの木目が美しい階段下には収納とお掃除ロボット用のスペースを。2.2階のフリースペースも薪ストーブの輻射熱でぽかぽか。
3.サーキュラーコットンの壁は弾力のある和紙のような触り心地。